

## 【研究区分：若手奨励研究】

研究テーマ：がん薬物療法中のがん合併糖尿病患者の首尾一貫感覚を高めるがん化学療法認定看護師の実践	
研究代表者：保健福祉学部 保健福祉学科 看護学コース 助教 澤岡美咲	連絡先：m-sawaoka@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者：保健福祉学部 保健福祉学科 看護学コース 教授 黒田寿美恵	
<b>【研究概要】</b> がんと糖尿病の双方の療養行動実施による様々なストレスを抱えているがん薬物療法中のがん合併糖尿病患者が主体的に療養に取り組めるよう、健康保持能力のひとつである首尾一貫感覚を高める看護支援の在り方を検討するために、がん化学療法認定看護師（CN）が実施している既存の実践を明らかにした。CNは首尾一貫感覚を構成する「把握可能感」「処理可能感」「有意味感」の各々を高める支援を行っており、患者自身が首尾一貫感覚を高めているプロセスを意識して患者の意向を優先しながら支援することが有用と示唆された。	

## 【研究内容・成果】

### 1. 研究内容

#### (1) 研究背景

がん薬物療法中のがん合併糖尿病患者は、がん薬物療法に対するセルフケアと糖尿病の療養行動の両立を求められる。しかし、がん薬物療法が血糖コントロールに影響を与えるなど、双方の治療が相乗的に様々な影響を与えるため、両立は容易でない。療養行動の両立のためには、このような中で抱えるストレスに適切に対処し、療養に主体的に取り組む必要がある。ストレス対処力向上のためには、健康保持能力のひとつである首尾一貫感覚を高めることが有用と考えられ、患者が疾患や治療の影響にうまく対処し、生活を整えられるよう支援することを責務とする看護師は、首尾一貫感覚を発達させるための支援をする役割を担っている。首尾一貫感覚は、現在自分の置かれている立場または、これから置かれる立場をある程度予測したり、理解しようとする感覚である「把握可能感」、生じた問題に対し、人的物的資源を活用し『なんとかしよう』、『なんとかできる』という感覚である「処理可能感」、問題の対処のしがいも含め、日々の営みにやりがいや努力する価値があると思える感覚である「有意味感」、の3つの下位概念から構成される。本研究では、「首尾一貫感覚」を「ストレス下でも健康を保つ能力であり、自分の生きている世界は筋道が通っている、腑に落ちるという感覚」と定義した。

#### (2) 目的

がん薬物療法中のがん合併糖尿病患者の首尾一貫感覚を高める看護支援の在り方を検討するためにがん化学療法認定看護師が行っている既存の実践を明らかにする。

#### (3) 方法

がん薬物療法を行っている病院に勤務し、がん合併糖尿病患者に対するがん薬物療法中の支援経験を有するがん化学療法認定看護師に半構造化面接を実施し、コード化・サブカテゴリ化・カテゴリ化の順で質的帰納的に分析した。県立広島大学研究倫理委員会の承認（承認番号：第22MH033号）を得て実施した。

### 2. 研究成果

がん薬物療法中のがん合併糖尿病患者の首尾一貫感覚を高めるがん化学療法認定看護師の実践は、表1の通りであった。以下、【 】内をカテゴリとして述べる。

【がん薬物療法副作用症状の有限性と今後に向けた肯定的見通しの認識獲得の促進】はがん薬物療法の副作用が今後どのように出現、軽減していくか予測することを可能としていることから把握可能感を高める支援と考えられる。【重症低血糖の前駆症状認知と予防行動体得への導き】は、重症低血糖の症状自覚という把握可能感を高めるだけでなく、重症低血糖に至る前に対処できるよう処理可能感も高めている。【がん薬物療法中の血糖の乱れを是正できるインスリン調整力醸成】、【低血糖・高血糖予防を考慮したがん薬物療法中の糖尿病食事療法確立に向けた伴走】は、がん薬物療法中に乱れやすい血糖コントロールに対し、インスリン投与量や

【研究区分：若手奨励研究】

食事内容を共に見直し、がん薬物療法と血糖コントロールを両立できるように援助していることから処理可能感を高めている。一方、【がん薬物療法中の血糖コントロールは常時厳格でなくてもよいとする姿勢】、【がん薬物療法中の糖尿病管理の一時的・部分的代行】は、糖尿病の療養行動を緩やかにしている状況を許容することで、がんと糖尿病の2つの療養両立への処理可能感を高めていた。【がん薬物療法により不安定な血糖コントロールに向けた患者なりの努力・工夫への注目と承認】、【後回しにしているがん薬物療法中の糖尿病管理の意味付け促進】は、がん薬物療法継続上の糖尿病管理の重要性、自分なりの血糖コントロール方法を医療者に承認してもらうことでがん薬物療法中に糖尿病管理をすることへの有意味感を高めている。

首尾一貫感覚を高める上では、把握可能感を高める支援を早い段階で行うことが、処理可能感や有意味感を高める支援に繋がるといわれることから、把握可能感を高める支援である【がん薬物療法副作用の症状の有限性と今後に向けた肯定的見通しの認識獲得の促進】を優先することが肝要である。がん薬物療法中のがん合併糖尿病患者が首尾一貫感覚を高めるプロセスに関する研究(澤岡, 2019)では、がんと糖尿病のどちらの療養も重要視する場合と直ちに死に至ることのない糖尿病は緩やかな管理でよいとする場合とがあることが明らかになった。このことから、糖尿病療養を緩やかにしている患者には、【がん薬物療法中の血糖コントロールは常時厳格でなくてもよいとする姿勢】や【がん薬物療法中の糖尿病管理の一時的・部分的代行】を行い、患者の意向を尊重した看護を行うことが首尾一貫感覚を高めることになると考える。

表1 がん薬物療法中のがん合併糖尿病患者の首尾一貫感覚を高めるがん化学療法認定看護師の実践

カテゴリ	サブカテゴリ
がん薬物療法副作用症状の有限性と今後に向けた肯定的見通しの認識獲得の促進	がん薬物療法副作用症状の有限性と今後に向けた肯定的見通しの認識獲得の促進
重症低血糖の前駆症状認知と予防行動体得への導き	重症低血糖の前駆症状認知と予防行動体得への導き
がん薬物療法中の血糖の乱れを是正できるインスリン調整力醸成	がん薬物療法中のステロイドによる血糖上昇にインスリン導入・増加で対処する必要性への納得感の向上
	自己流のインスリン調整により繰り返す低血糖・高血糖ががん薬物療法の経過日数に応じたインスリン調整により是正されることへの実感の促し
	食欲低下時に低血糖・高血糖を起こさないためのインスリン調整力獲得の促進
	がんの症状により食事量が一定しない中でも食べられるときには食べたいというインスリン療法中の患者の希望実現に向けた高血糖・低血糖予防方法の確立
低血糖・高血糖予防を考慮したがん薬物療法中の糖尿病食事療法確立に向けた伴走	食べられるものを食べた場合の血糖変動を相互に確認したうえで副作用出現中の落としどころの協議と合意
	ステロイドや単純糖質の過剰摂取が著明な高血糖をもたらすことへの実感の促し
がん薬物療法中の血糖コントロールは常時厳格でなくてもよいとする姿勢	食欲不振により低血糖を回避するためのがん薬物療法中の糖尿病食事療法の緩和
	血糖に無頓着でもコントロール状態が許容範囲である場合の食事制限緩和
がん薬物療法中の糖尿病管理の一時的・部分的代行	がんのがん薬物療法への心配で頭が占領され余裕がない場合の血糖管理の代行
	がん化学療法中の糖尿病の自己管理を看護師に頼ろうとする患者の姿勢の許容
がん薬物療法により不安定な血糖コントロールに向けた患者なりの努力・工夫への注目と承認	がん薬物療法により乱れやすい血糖コントロールに向けた患者なりの努力・工夫への注目と承認
後回しにしているがん薬物療法中の糖尿病管理の意味付け促進	がん薬物療法終了後・がん治療後の人生を見据えた糖尿病管理が必要であることへの動機づけ
	血糖コントロール状態ががん薬物療法継続の可否・安全性を左右することへの認識強化
	がん薬物療法中に停滞している糖尿病自己管理の円滑化・再円滑化に向けた糖尿病専門家の直接介入場面の設定